令和元年度調査研究報告書

子育てバリアフリーの現状と
より暮らしやすい環境作りの重要性に関する研究

長野大学　社会福祉学部　伊藤専門ゼミナール

F16042　京嶋みなみ

指導：伊藤英一教授

目次

１．	はじめに	１
２．	現状	１
３．	調査	１～６
４．	考察	６～７
５．	まとめ	７～８
６．	引用・参考文献	８

１．はじめに

少子化が問題視されている現代では、[1)] 少子化対策の一つとして子どもを安全で安心して育てることのできる生活環境整備が求められている。生活環境整備の中でも移動や施設利用は妊産婦・乳幼児連れの保護者には重要であり、子育てバリアフリーとして目を向けられているのだ。子育てバリアフリーとは[2)]“子どもが安全に安心して暮らすことのできる生活環境整備の中でも衣食住に次ぐ重要性を有する移動や施設利用について、妊産婦・乳幼児連れを対象とした外出環境の整備”のことであり、より良い改善が求められている。しかし、[3)]“妊産婦・乳幼児連れの期間が一過性であること、少子化により子育ての経験を持たない人の割合が増加していること等により、子育て期とりわけ妊産婦や乳幼児連れの外出行動に関する実態把握や支援策に対するこれまでの取り組みは必ずしも十分といえない可能性がある”とされているのだ。

未来を担う子どもたちが安心した生活を送れるよう子育てがしやすい環境は必要不可欠であり、日常生活の外出時には子どもを安心して連れ出すことができることが大切であると考える。私には現在０歳の子どもがいるため実際に自分自身で子育てをしながら体験し、子育てバリアフリーの現状やニーズ、課題等について調査しまとめる。

２．現状

子育てバリアフリーは様々な場面において必要とされており、実際に施設整備の改善を行っている所もある。乳幼児同伴の利用者が多いと考えられる公共施設には授乳やオムツ替えが必要であることを考えたトイレの十分なスペースの確保、中にはベビーベッドが置かれている所もある。また最近では授乳室を別室に専用部屋として作っている施設も多く存在するのだ。しかし、古い施設などの多くは未だ改善されていない所もあり、利用者はバリアフリーのある整った施設を探さないとならないという現状がある。また、最も重要視される清潔面では古い施設においては課題が多く残っているのだ。これまでは子育てする側が外出を控えたり、行き先が限られるため我慢したりしていた。しかし現在では子育てする側も行きたいところへ自由に快適に外出できる社会環境が求められてきており、外出ニーズが少しずつ変化してきているのだ。

３．調査

今回は私が住んでいる地域で多くの人が集まる施設であるイオンモール甲府昭和店にて子育てバリアフリーに着目し調査する。

＊おもいやり駐車場（ブルーゾーン）

山梨県には上右図のような思いやり駐車区画利用証というものがある。利用証の交付対象は、身体障害・知的障害・精神障害・発達障害のある人、難病患者、高齢者、妊産婦、けが人などで歩行が困難な人とされている。この利用証を見えるところに置くことで上左図のような店内の入り口により近い場所に車を停めることができるのだ。

妊産婦の交付要件は、母子健康手帳交付日から出産後１年６ヶ月まで、ただし出産後は１歳６ヶ月以下の乳幼児と同伴の場合に限るとされている。おもいやり駐車場は車間が十分にとってあり入り口からも近いため、とても便利だが、思いやり駐車区画利用証を持つ対象者の数に対し、駐車台数が少ないと感じた。開店と同時に行かなければすぐに埋まってしまうため、利用証があるからといって必ずしも停められるわけではないのだ。

＊ 赤ちゃんルーム

甲府昭和イオンモールには各階に赤ちゃんルームが設けられており、赤ちゃんルームにはおむつ替え用ベッド、個室になっている授乳スペース、ミルク用給湯器、哺乳瓶洗浄用シンク、３階には身長計・体重計がある。おむつ替え用ベッドは数カ所あり、落ち着いた

環境でおむつを変えることができた。横にはおむつ専用のボックスが設置されており、おむつを持ち帰らなくても良く、手荷物が減るため、とても助かった。

イオンモールに限らず最近では様々な場所でおむつ専用のゴミ箱が設置されているのを見かける。授乳スペースは個室のようになっており、鍵もついているので安心して授乳でき、ある程度の広さがあるため、ベビーカーごと入ることができた。ミルク用給湯器は、ミルクをあげる人にとって、とても便利である。お湯を持ち歩かなくて良いということだけでなく、衛生的にも安心してあげることができる。子供を連れていると、何かと荷物が多くなってしまうため、少しでも荷物を減らすことができるのは嬉しいのだ。だが給湯器は赤ちゃんルームの中にあり、そこには授乳室も一緒になっているため、もしも乳幼児連れが母親でなく父親であったら入りにくいと感じた。必ずしも女親だけがミルクを与えるということはなく、イクメンという言葉が流行になるくらいだから、男親のことも考えた設備にすると良いと思った。

全体的に新しい施設ということもあり、設備面ではとても整っているのだが、広いイオンモール内に赤ちゃんルームが各階の同じ方面に、一箇所ずつしかないというのは、少し不便に感じた。いつ泣いたり、ぐずってしまったりするかわからない子供を連れ、買い物をするのは大変なことであり、体力をつかうためもう少し増やすべきだと感じた。トイレはたくさんあり、そこでも、おむつを変えることは出来るのだが、赤ちゃんルームには、同じくらいの子を持つ親が多いため、お互い理解があり、安心して居られるのだ。一つのコミュニケーションの場にもなると考えられる。

＊ トイレ・多機能トイレ

赤ちゃんルーム以外にも、トイレや多機能トイレには、おむつ替えベッドが設置されている。このため、赤ちゃんルームまで遠く、急いでいる場合などはトイレでも利用できる。

私が気になっていた男性用トイレでのおむつ替え用ベッド設置については、女性用トイレ同様に設置されており、乳幼児を連れて入ることが出来るようだった。

＊わくわくのおか

＊あそびのもり

イオンモールには子供が遊べる場所がいくつか設けられている。例えばわくわくのおかには、すべり台や絵本の読める図書コーナーがあり、３～６歳くらいの子供向けとされている。あそびのもりは、木育スペースとして２～４歳向けとされている。他にも、フードコート内にキッズフォレストというキッズフードエリアを設け、そのなかでミニチュア動物園をつくったり、外には子供が遊べる遊具が設置されてあったりと子供の居場所作りが工夫されているのだ。

遊べる年齢に限りがあるものの、子供が楽しめる場所がいくつかあるのは良いことだと感じた。親の目の届く範囲内であるため、安心して遊ばせておくことが出来る。

＊ベビーカート（ショッピングワゴン）

最近では多くのスーパーやショッピングモールでショッピングワゴンが配置されてきている。子供が喜ぶようなキャラクターものの乗り物から、生後２ヶ月から使えるものまであり、ベビーカーを持参しなくても、子供を連れて行くことができるようになった。特に生後２ヶ月から使えるものに関しては、しっかり体をガードするものがあり、三段階のリクライニングができるため、首が座っていなくても寝かせて乗せることができるのだ。

乳幼児を連れての買い物は大変であり、ベビーカーを持ち歩くには大きな負担になるため、乳幼児から乗れるショッピングワゴンがあるのは助かるのだ。店舗によって扱っているワゴンは異なるが、基本的な仕組みは同じであるため、安心して乗せて歩くことが出来ると思う。

イオンモールでは、エスカレーター横などに置いてある事が多く、店内に入ってから探す必要があり、たどり着くまでに時間がかかった。イオンモールに関しては店内が広いため、各入り口にいくつか置いてあると、駐車場からすぐに乗せることができ、手が空くため良いのではないかと感じた。

４．考察

イオンモール甲府昭和店における子育てバリアフリーのメリット、デメリットについて表にまとめる。

	メリット	デメリット
交通システムに関すること	・専用駐車場スペースがあり、車間が広い ・１時間に２回のペースでバスが出ている ・タクシー乗り場にはタクシー直接電話があり、無料でタクシーの配車センターにつながる	・専用駐車場の駐車可能台数が少ない
店内の活動機会に関すること	・専用ベビーカーがある ・段差がないためベビーカーを 押しやすい ・子供が遊べる場所がいくつかある ・赤ちゃんルームがある（授乳室・おむつ替え用ベッド）	・ベビーカーを探すのが大変 ・子連れでの飲食店は入りにくい ・通路が狭い店舗はベビーカーで入れない
店内の設備等に関すること	・授乳スペースが個々にあり鍵がついている ・給湯器がある ・男性用トイレにおむつ替え設備がある	・赤ちゃんルームの中に授乳室とおむつ替えベッドがあるため男性が入りにくい

イオンモール甲府昭和店はリニューアルしたこともあり、設備等は他のショッピングモールと比較しても整っていると考えられる。ショッピングモールだけに限らず多くの施設では未だに子育てにおけるバリアが残っているのだ。様々なことが考慮されていたイオンモールだったが、一日過ごし、利用してみて、育児は女性がするものという固定概念があるように感じた。オムツ替えスペースは、女性用トイレに設置されていることが基本とな

っていることが多い中、イオンモールでは、男性用トイレにもあった。しかし、赤ちゃんルームの中に設けられている専用のおむつ替え用ベッドやミルク用の給湯器等の利用は、授乳スペースも一緒になっているため、男性はとても入りにくく、利用できないと考えられる。

女性限定とはどこにも書かれてはいないものの、入ってはいけないような空気があるせいか男性は入らないと思う。女性が必ずしもミルクをあげたりオムツを替えたりするというきまりは無く、男性がする場合を考えると男性目線からも考えられた設備が求められてくると考えられる。近年子育てに関する考え方が見直され、男性の育児休暇取得が推進されてきているが実際は、取得率はなかなか上がらないのが現状である。また新たにワンオペ育児といった言葉がでてくるなど未だに改善されていない部分も多く感じる。子育てバリアフリーは子供や子育てをする者のためであり女性だけではない。そもそもの育児に対する概念を見直した上で子育てバリアフリーに取り組む必要があるのではないかと考える。

他にも外出時などにおいて、バリアを感じることも多く、他の子育て中のお母さんなどの意見では、フードコートに離乳食を温めるための電子レンジがあると助かるという声もあった。都会の大規模なショッピングモールは、電子レンジが置いてあるところが多くあるのだが、山梨では限られてしまう。イオンモールにもあるのだが、一階のスーパーの休憩所にあるため、三階のフードコートからは遠いのだ。他にも飲食店やフードコート内の店舗など、多くの店にアレルギー表示がなく、アレルギーを持つ子の親は、事前にわかっている限られたお店に行くしかないという声もあった。また、私のように身近に預けられる人がいないという人も多く、なかなか息抜きができず、ストレスを抱えてしまい、育児を楽しめていないという声もあった。国土交通省によるまとめの中にも挙げられているように、外出自体への影響として、授乳や昼寝など子供のスケジュールに合わせて行動しなければならなかったり、買い物時に商品をじっくり選べなかったりなど、子供中心の生活になったことによるバリアも多く存在する。子供側のバリアだけでなく親側のバリアを軽減するためにも、イオンモール内に子供を預けられるような場所があると良いのではないかと考える。短時間でも子育てから開放されることで息抜きをすることが出来るのだ。そのためには安心して預けられるような場所や、人材確保が必要であると考える。お店側の配慮によって、より多くの人が安心して出かけられるのだと改めて実感した。

５．まとめ

今回実際に子育てをする側から、子育てバリアフリーについて考え、ショッピングモールを調査したことで、子供を持つ前と持った今とでは、見る目線が大きく変わるのだと実感した。今回はイオンモール内の子育てバリアフリーのなかでも、特に設備等に着目し、調査した。

家族連れの利用が多いと考えられることもあり、他のショッピングモールに比べ設備は整っていたと思う。しかしその中で男性の子育てのあり方について、考えさせられるような場面もあった。

男性の育児参加に関する面で少しずつ変化してきている日本だが未だに男性は働き、女

性が育児を行うといった風習が残っているように感じる。子育てバリアフリーを通して男性も育児に参加することが必要であるということを社会全体で考えていく必要があるのだ。

子育てバリアフリーは子育てにおけるバリアとなるもの全てに該当するため、子供の月齢や性格によっても異なる。また、都会のように電車や徒歩での移動が多い地域や、私の住む山梨のように車での移動が多い地域など、それぞれの地域によっても、必要とされる子育てバリアフリーは変わってくるのだ。その中でも共通して必要だと言えることは、子育てバリアフリーに対しての認識を、子をもつ人以外にも広めることだと考える。そのためには、誰もが目につく表示等を増やし、意識的に変えていくことが必要である。

子育てにおけるバリアは、毎日休みのない育児に追われており、自分の時間が思うように取れないなど母親側の心のバリアも深く関わっているように感じる。育児を楽しむためにも適度の息抜きは必要である。そのためには、気軽に安心して子供を一時的に預かってもらえる場所や、同じ不安や悩みを抱えた母親同士が集まれるような居場所作りが求められているのだ。

より多くの人が子育てバリアフリーに対しての認識を深め、配慮や手助け等がお互いに自然に出来るような社会になってほしいと考える。

引用・参考文献

１）バリアフリー：安心して子育てができる環境整備のあり方に関する調査研究…http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/barrierfree/sosei_barrierfree_fr_000006.html

２）３）安心して子育てができる環境整備のあり方に関する調査-国土技術研究…http://www.jice.or.jp/cms/kokudo/pdf/tech/reports/18/jice_rpt18_4.pdf

長野大学社会福祉学部
伊藤専門ゼミナール報告書
令和２年３月発行

本件に関する問い合わせ先：
長野大学社会福祉学部社会福祉学科
伊藤英一（教授）
（長野県上田市下之郷 658-1）